

# 自閉的傾向児の集団適応をめざして

—— K・N児の朝の会・農園作業から ——

穴 戸 悟

## 1 対象児のプロフィール

生徒名 K・N(男) 昭和45年6月13日生(中学部2年) IQ 測定不能

本校小学部より入学し現在に至る。

### (1) 一般的特性

長い間いすにすわり続けることが困難であり、教室外へ飛び出すことが多く、ひとりで校庭のすみや体育館での遊びを好む。教師がいっしょにすわれば、短時間ではあるが、すわり続けることもある。大きな音を極端にきらい、すぐ耳をふさいだり、その場から離れようとする。教師と1対1であれば、簡単な指示に従うこともある。

### (2) 問題点と研究に取り上げた理由

K・N児は、集団を極端にきらい、どんな学習の場面でも教室外へ飛び出していたり、ひとり遊具で遊んだりしていた。級友たちと共通の学習の場を持たないために、技能的な高まりも望めず、時おり教室にいたとしても、何もすることがなく、ひとりで遊んでいた。そして、いつの間にか教室外へ飛び出していく。再び教室に戻ってきても何もすることがないという悪循環を繰り返していた。こんなK・N児が、将来の社会自立に向けて必要な事柄は多々あろうが、まず皆の中において皆のしている学習や、作業にいっしょに参加できることが必要だと考えた。1対1での指導が成立したとしても、それは限定された場面だけのことであり、K・N児の社会化には直接には関係ないと考えたからである。

## 2 個人目標の設定と研究方法

### (1) 個人目標の設定

このようなK・N児に対し、級友と同じ学習の場で活動させる事は、学習の場にあるK・N児の抵抗を少しずつでも取り除いていけば可能になるのではないかと考え、K・N児に「皆の中で活動できる」という個人目標を設定した。

### (2) 研究の方法

K・N児の集団への参加を学校生活のすべてに求めるのではなく、場面を区切りそのひとつひとつの場面で集団への参加を考えていった。ひとつの場面での定着が、K・N児の活動場面・集団の意識化を拡大・深化させることになるのではないかと仮説をたてた。この取り組みにあたって次の2点は特に留意するようにした。① 1日のうち必ず、K・N児にとって自由に遊べる時間を設定してやる。② 他の生徒が何らかの活動をしていても、K・N児には強要しない。この2点は必ず

守るように心がけ指導を重ねていくことにした。

### 3 授業の構成と指導の手だて

目標達成のために、朝の会と農園作業の中に場面を設定し、「みんなの中で活動する子」を旨とした。主なK・N児の指導場면을例示すると次のとおりである。

#### (1) 朝の会の構成(12月を例示)

学 習 活 動	K・N児に対する手だて、配慮
1 制服から体操服へ着がえる。	1 K・N児には、自分の脱衣かごを取りに行くように指示を与えてやる。着がえの時には、12月になってから毎日、普段の学習にも流しK・N児も抵抗なく聞いていると思われるクリスマスソングを流すことによって音に対する拒否反応を取り除き、少しでも楽しい雰囲気を作りだしてやる。
2 「おまつりサンバ」に合わせリズム打ちをする。	2 なるべく、教室の中央で皆を意識しながら、リズム打ちができるようにするため、K・N児の手を取り教室の中央に連れて出てやる。リズム打ちについては時々、K・N児の持っている楽器をいっしょにたたいてやるが、長時間連続しての強要はしない。
3 「ねこふんじゃった」に合わせてリズム打ちをする。	3 全員に席に着くよう指示をするが、K・N児については手を引いて席に着かせてやる。リズム打ちについては、2の場面と同じようにする。なお、この2曲は昨年から毎日朝の会で使用している曲である。
4 「おはなし、日記」で教師の話を聞く。	4 K・N児に指示を与え、皆の生活ノートを取りに行かせる。もどしに行かせる時には、教師がついていってやり、置く位置を指示してやる。各人の生活ノートと置き場は、色のマッチングで置けるよう、色紙で色分けがしてある。



#### (2) 農園作業の構成(11月を例示)

学 習 活 動	K・N児に対する手だて、配慮
1 本時の主な作業内容を聞く	1 K・N児に対して、A・K児をペアにして、いっしょにすわらせて話を聞かせるようにする。
2 いもほりの作業をする。	2 K・N児、A・K児のペアに教師がひとりついて、声かけを続けはげます。K・N児には、A・K児とともに掘り起したさつまいもを定められた箱に入れる作業をさせる。
3 いものつるのあとしまつをする。	3 A・K児が、いものつるを、K・N児に渡し、それを所定の位置に運ぶようさせる。教師はA・K児とつるを捨てる場所の中間に位置し、常に声かけをし、K・N児の調子によっては、いっしょに歩いてやる。
4 収穫されたいもを教室まで運ぶ。	4 いもを運ぶのは、K・N児以外の生徒にさせ、K・N児については、次の給食時まで、体育館で自由に遊ばせる。



## 4 指導実践例

### (1) K・N児が朝の会に参加できるまでの指導経過

#### ① 教師と1対1で農園で朝の会の時間中すごした時期

朝の会には音楽場면을多く取り入れていたので、K・N児は強い抵抗を示した。そこで、朝の会の後半の「おはなし・日記」も含めて、そのあいだ中は農園ですごした。はじめは私の方は見向きもしなかったN児だったが、毎日のような声かけや語りかけをするうちにしだいに私の方も見るようになってきた。そして、朝の会が終るころあいを見て教室に入るようにした。

#### ② 農園での時間を少しずつ短くし、朝の会の後半に参加させようとした時期

少しずつでも朝の会の雰囲気慣れさせようと考え、ころあいを見て朝の会の「おはなし・日記」に参加させていった。いつもより早く「K・N君、教室に入ろう」と言うにつれて来る。教室前のテラスまでついて来るが、皆が席に着いている姿を見て入ろうとしない。テラスの足ふきマットの上で、朝の会が終わるのを待っていた。そんなK・N児に対し何度も「教室に入ろう。みんな待っとるで」と声かけをした。しだいにK・N児は「おはなし・日記」の途中でも教室に入り、皆といっしょに席に着くことができるようになった。そして、教室に帰る時間を徐々に早くし、しだいに「おはなし・日記」には参加できるようになった。

#### ③ 朝の会の音楽場面に少しでも参加させようとした時期

朝の会の音楽場面以外には参加できるようになった。次に何とか音楽場面に参加させようと考え、音楽場面が終る直前に連れて教室に向かう。K・N児は再び農園に向かおうとするが、よほど調子が悪い時以外は、なだめたりしてテラスですごさせ「おはなし・日記」から参加させるようにした。また、ラジカセ直接の音でなく、外部スピーカーを使用し少しでも音を柔く工夫した。

#### ④ 朝の会の始まりから参加させようとした時期

このころになると、N児の行動パターンとして「教室(着替え)→農園(教師と1対1)→テラス(音楽場面が終るのを待つ)→教室」が定着してきた。そこで、K・N児の行動パターンを大切にし、K・N児の着替えがすみ次第、農園に出かけ、畑のようすをひとまわり見るとすぐに教室に帰るようにした。教室に入ると、朝の会はまだ始まっていない。KN児は、朝の会の音楽場面のあいだはテラスですごすようになった。そして、声かけをすると調子の良い日は、教室の中に入ってくるようになった。そして、この頃が、梅雨の時期でもあり、天気の関係で次第に農園に出かけるパターンもくずれ、K・N児も、教師と1対1で教室にいることが多くなってきた。音楽については、特に導入部分では、毎日同じ曲にして、少しでもなじめるようにした。

### (2) 作業学習において皆といっしょに活動できるK・N児を求めて

朝の会に参加できるようになると、K・N児は教師と1対1であれば、一日の生活の中で、かなりの場面、集団の中にいることができるようになった。そこで、K・N児が好んだ農園を指導の場

として、作業に取り組みさせるようにした。その内容は、草運びだけに限定した。

① 1、2度運ぶことができた。

K・N児は、農園に出かけると近くの遊具の上でひとり遊びをしている。突然、私のそばに来たので何気なく「K・N君、これ捨てて」と抜いた草を目の前にさし出すと、すっと手をのぼして、その草を持って20m程離れた草捨て場まで捨ててに行った。名前を呼ぶと、またそばに来て草捨てをしてくれた。

② 教師の声かけによって作業を続けることが可能になる。

K・N児が草運びをしてくれる事がわかったので、少しでも長く作業を続けさせようと考えK・N児といっしょに草運びをすることにした。K・N児が草を捨てるとすぐ声かけをし、畑に帰らせた。だんだんと声かけの位置を離していった。逃げてしまうこともあったが、その時は、再びK・N児に近づいて声かけをしていった。そうしていくうちに、教師は畑で草取りをしながらK・N児に声かけをするだけで、作業を続けることができるようになった。

③ 教師の声かけなしで作業を続けた。

農園の片すみに、かれ草が山のように積み上げられている。中学部主事が仕事の合い間に抜いたものである。「K・N運べ」という声に、K・N児は、両手にその草を持ち、草捨て場まで運んだ。二、三度指示があっただけで黙々と運んで、30分程度で運びきってしまった。

④ 友だちとのかかわりの中で

このような、私とK・N児のかかわりを見ていた生徒のひとりが、「K・N君、これ」と私のまねをした。K・N児はおかまいなしにそれを持って草捨て場に向った。他の生徒がしても同じである。K・N児は、畑のあちこちに置いてある草を、教師や友だちの指示で捨てられるようになった。

## 5 考察と反省

外へ飛びだしていくだけのK・N児の姿から比べれば、集団の中で皆といっしょに活動するという目標は達成された。草運びだけでなくラジオ体操の時間には皆のそばで、手足を動かしている。釘打ちの作業も皆といっしょにできるようになった。しかし、あまりにも教師との1対1の指導を大切にしたので、何をするにも指示を受けての行動だけで、場面に応じた自主的な行動の形成がなされなかったことを反省している。

## 6 今後の課題

K・N児にとって、「できる」という事柄は増えてきたが、それは教師とのかかわりの中だけのことである。少しでも集団を意識づける意味でも、K・N児の「できる」ということを集団とのかかわり合いの中で、どう指導していくかが、今後の課題となると考える。